

巻後に題す

にぶい音を叢に残して細い光芒一條、中空に舞ひ上ると見る間に、あれ見よ五彩の花瓣が一際美しい色合いを夜空に浮かばせる。

祭囃子のふゑ、たいこの音が初夏の爽ひ風に送られて浴衣の袖をゆすぶる。賑かな裡に早や夜も更けて、月光は冴え渡り、やがてしゞまな夜蔭に一切が溶け込んで行く。

夏祭りも全く終つてあたりがひっそりとなつた三更、私は先程から机に向つたまゝ、貧しい灯の下で、主人の回顧録を幾度か読みかへしてゐる。

口述をそのまゝ筆記した初稿を清書し、點綴して仕上げてはみたものゝ、拙ない筆の運びに今更ながら愛想が盡きる。

主人の過去は生やさしい形容詞では到底表はず事の出来ない眞摯な人間の苦闘史であつて私の菲才が却つてその尊い光輝を傷けてさへゐる。しかし拙文ではあるが主人のありのまゝの、裸形の姿だけでも傳へる事が出来たかと思つてゐる次第で、それが私自身の淺學秃筆に對するせめてもの自己諦觀である。

人が此の世に生を享けた時から、既に試練の道が待つてゐる、誰れでも通らなければならぬ苦勞の道を、主人は主人一流の生き方で進んで來られたのであつて、特に最近の如き益々元氣に社会的活動を続けられて私どもに尊い示唆と得難い教訓を垂れてゐられる。

私共若い者は今後益々勉強しなければならぬ、苦勞をしなければならぬ、人生を樂しいものと觀ずるも、疎ましきものと想ふも、凡ては主觀の働きが定めるものであるが、私共はこの書を人生處世の教科書として、尚ほ主人の人生五十からの光輝ある御奮闘振りを模範として、又主人のご指導に依つてより良き生き甲斐のある毎日を送りたいと考へる。

尚ほ本書中には年代別に我が國の政治經濟諸情勢の推移について縷述して附記としたが何等かの参考になれば誠に有難いと思ふ。

終りに今回の編纂に當り畏兄神戸一氏より並々ならぬ御推助を受けたるを茲に明らかにする次第である。

昭和十二年六月

鬼頭利之

最後に本書刊行の由來に就て一言申し添へたいと思ふ。

元來著者の考へとしては過去の色々な思ひ出を折に觸れ、時に觸れて書き散らしてあつた反古を整理し、それを纏めて、精々謄寫版の程度で、近親、或ひは知友に頒ちたいと云ふ目的であつたが、編者が編纂を續ける裡に不識不識に編者自身に慾が出たものが遂に活版で印刷し立派に製本迄して刊行する事となつたのである。

従つて誠に不備な點が多く、内容が外觀に添はぬ憾が深い、之の點に就て讀者諸士は右述の理由を以て諒とせられたい。